

新

歌人群像

# 太田水穂

● 執念の象徴短歌

● 大滝貞一 ●



芭蕉研究と主観の具体

太田水穂がみずからの雑誌「潮音」を創刊するのは一九一五（大正四）年七月、四十歳の時である。その五年前の一九一〇（明治四十三年）年に、若山牧水の第一期「創作」に「疑問の解決と個性の質量」（尾上柴舟の短歌滅亡論に対する短歌非滅亡論）を書いて、柴舟の立論に論駁する。翌年、雑誌「同人」を發行（四か月で廃刊）し、それに加わった同郷の太田喜志子を牧水に紹介、結婚に至らしたり、その後も「創作」誌上への短歌評論執筆に協力したりする縁に因り、「潮音」發行に際しては逆に牧水の助力を得る。創刊時に記紀歌謡や『万葉集』講義を執筆するが、九月より「短歌立言」を連載、これが水穂の芸術論の基幹となり、同時に結社の聖典となつてゆく。「短歌立言」は一九二二（大正十一年）まで継続し単行本に纏められた。

「歌はどうしても現象から這入らずに感動の方から這入つて行かなければならない。或る現象に動かされた時、その現象の状態を表はさうと屈托するよりも、その現象に動かされた心の動向が出たか出ぬかを苦心すべきである。現象の描出は此の主観の響きに即して初



左から、水穂、青丘、光子

めて意義を發するに過ぎないものである。」

こうした立論はまた、東洋哲学の汎神思想や仏教、カントやベルクソンなどの思想からヒントを得た「一木一草皆吾れと一なり」といった、いわゆる「万有愛」精神にも収斂されたりする。この時期の制作作品は、第三歌集「雲鳥」（一九二二〜大正十一）年五月・春陽堂刊）に結集した。こんな歌が代表される。

野毛山の異人屋敷に小米花まばらに散りて夏さやかなり

おのづから日のぬくときに藁鳩の高きにのぼり鶏啼きにけり  
野は花の極楽日和旅日和馬ほくほくとゆくすがた見ゆ

景物によつて動かされた心の状態、作者の

観想的心象のさやかな動きが見てとれる。こ  
とばをかえていえば、主観の具体化といつて  
よいのであろう。「小米花」「鶏」「馬」は単  
なる景物の姿ではなく、作者の心象に映しだ  
された微妙なる感心の象なのであつた。

この期、水穂は肺炎に罹り重態に陥つたり  
するが、一九二〇（大正九）年十月に「芭蕉俳  
句研究会」を發足させて、幸田露伴・沼波瓊音・  
阿部次郎・安倍能成・小宮崑景隆・和辻哲郎など  
錚々たる参加者を集めて、毎月一回の合評研  
究会を開く。成果は山下秀之助らの筆記によ  
つて「潮音」誌上に連載され、一九二五（大正  
十四）年十月まで五十八回も続く。その影響  
により、芭蕉俳諧のわび・寂などの理論のほ  
かに、匂い・響き・移り・軽み・省略・飛躍な  
どの手法を学び、その理念を敷衍した、いわ  
ゆる「日本的象徴」短歌論を推進しようと決  
意する。第四歌集「冬菜」（一九二七（昭和二  
年四月・共立社刊）は、この芭蕉俳句研究会時  
代の作品に相当する。

春すでにおくたの花も散り方の老をば  
見せて山寂びにけり  
きり削ぎの一枚岩を落としくる滝のひ  
まきはみな烟なり  
秋の日の光りのなかにともる灯の蠟よ  
りうすし鶏頭の冷

「従来の短歌は多くの点に於て道行きの詠嘆  
又は描写であるのに、俳句は一気に呵成し、  
若しくは直下に道破すると云ふやうな処があ  
る。短歌は口説きであり俳句は喝である。短  
歌をして口説きの芸術から喝の芸術に進為さ  
せる努力が今の歌壇の要求では無いか」と提  
言し、一首の中に「象の強さ」、つまり「風  
韻のなかに動く象のひびき」を求めようとす  
る。抽出作品の中では、その主観の具体化に  
苦心して、直観的雄勢ともいうべき象徴性を  
とらえている。「おくたの花も散り方の老を  
ば見せて」「滝のひまきはみな烟なり」「とも  
る灯の蠟よりうすし鶏頭の冷」などに、それ  
を指摘することができるであろう。

水穂のこうした「日本的象徴」短歌への傾  
倒は、「明星」を含めた明治末期の象徴歌が、  
直観に立つより、理智的作爲的構成としての  
比喩の技巧の面にのみ目立ち、心象の他物へ  
の転置ないしは拡大に發展しないことへの不  
満に基づくものであつたのである。

## 写実短歌への拮抗

「象徴に於ける主観の具体といふこと——心  
を象どるといふことは、具体物化、材料化と  
いふやうな種類のものではなく、その主観が芸

# 太田水穂

術の体を具へる上に必然必須の基礎的条件たるべき、線、陰影、言語、音声の如き根本的なものを取つてくる場合を云ふのである。」

「短歌は抒情詩であるかぎり、すでに先天の約束に於て象徴であるべきものである。この辺のところでき、ろみに短歌の写生といふことなどを考へて見るとする。あの写生などといふことは、短歌の本質からは極めて遠いまた極めて末梢の問題であることが分明せらるゝであらう。」

あるいは、「物は主観の仮託に過ぎないものであるべきであるのに、あべこべに物が主であつて、心が従である如きものとなり、終に今日のごとく物を写す芸術——物のために芸術が存在するやうな方便の道——のところまで墮落してしまつたのである。」

(以上「短歌象徴論」)

水穂はみずからの「日本的象徴」の作歌を推進展開してゆく上で、その理論的指標の確立にも力を注ぐ。その結果として、「物を写す方法」を中心とする「アララギ」写実主義との拮抗が鮮明になつてゆく。

そんな折、たまたま一九二九(昭和四)年十二月に「アララギ」誌上に載つた、斎藤茂吉の歌「へよよひの露ひえまざるこの原に病雁おちてしばしだに居よ」を、芭蕉の「病雁

の夜寒に落ちて旅寝かな」の模倣と「潮音」に書いたことにより、茂吉の猛反撃を受けて世に知られた「病雁論争」を引き起こす。茂吉は「太田水穂を駁撃す」「欺瞞太田水穂の面皮を剥ぐ」「太田水穂の歌を評す」などと執拗に論戦を挑んだが、水穂は「斎藤茂吉追討記」で激しく応酬したのみで矛を収めてしまふ。が、この論争によつて、写実対象の構図がより鮮明になつたといえよう。

水穂をして難解な理論学者ととる人も多いのであるが、「しかつめの水穂」とか、主要同人の進言に激怒し一年間出詠停止にするなどという、頑固一徹なまでの潔癖性もあり、せつかくの「アララギ」対抗旗印も、近寄り難い理論偏重の思潮ととられ、必ずしも親近さや賛意を全面に受け得なかつた。しかし作歌の上では第五歌集『鷺・鶴』(一九三三(昭和八)年十二月・岩波書店刊)と第六歌集『螺鈿』(一九四〇(同十五)年十二月・京都人文書院刊)により最も円熟した境地に達して、軒昂ぶりを示すのである。その両歌集から抽出してみる。

青き脊の海魚を裂きし俎板にうつりて

うごく藤若葉かな

『鷺・鶴』

あさつく日岩のはだへにさし入りて瑠璃を切りゆく谿河の水

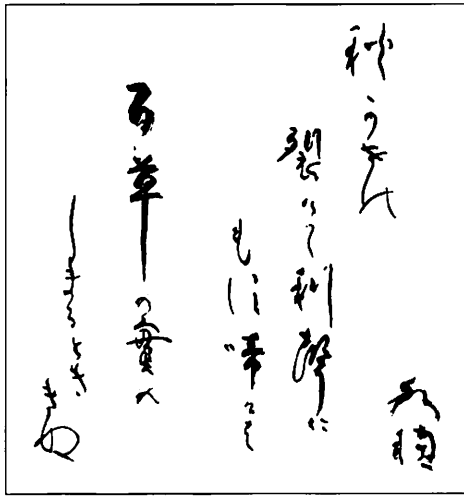
河豚くうていのち死なまし海棠の紅さ



新万葉集完成記念。後列左から4人目が水穂(1939年)

めざめと七日雨ふる  
毛萇花五月の水のなみなみと空のくも  
りを持ちて流るる  
比叡より横川へくだる道のべの合歓よ  
りひくし鳩の湖づら  
白王の牡丹の花の底ひより湧きあがり  
くる潮の音きこゆ

題名の鷺は清くさやかなるもの、鶴は執拗にして多欲なるものの象徴とされた。この二歌集により写実説盛行の勢いに押され、眼に見えるもの、絵画的なものに限定されがちであった作歌傾向に、主観感応の方向を定着さ



せる。感覚のみずみずしさに生命感を付加して、まさしく象徴短歌の一極点を示すに至ったのである。例えば、日の岩肌への浸入による「瑠璃を切りゆく谿河の水」の清冽な生命感。白い気品の牡丹の花奥から湧き上る潮の音と香、感覚美による宇宙観的イメージ展開など、余人の及ばぬ境地を具現した。

### 光子・青丘への継承

太田水穂は一八七六(明治九)年十二月九日、長野県東筑摩郡新田村に、父億五郎、母くりの三男として出生。本名貞一。一八九四(同二十七年)、長野県師範学校入学。同級に塚原俊彦(島木赤彦)、上級に勝家貞二郎(落

合直文門)、高野辰之らがいた。一八九八(同三十一)年、同師範学校卒業、山辺尋常高等小学校訓導。以後、和田小学校校長、松本高等女学校教諭を経て、一九〇八(同四十二)年に上京、私立日本歯科医学校(現日本歯科大)倫理学教授となる。翌年三月、有賀みつと結婚。一九二六(大正五)年三月、亡兄嘉曾次の三子・兵三郎を養育、後に嗣子となす。このみつは四賀光子、兵三郎は太田青丘である。

太田水穂は一八八五(明治十八)年四月二十一日、長野市生まれ。一九〇五(同二十八)年に水穂の求愛を受けたが、向学の志を棄てず婚約。一九〇九(同四十二)年、東京女子高等師範卒業と同時に結婚。二十四年間に及ぶ教員生活を送り、書齋の人・水穂を尊敬して支え続け、教職を退く際に「ひたすらなる人の歩みのあと追はむおのが負ひ目は今日ぞをへぬる」と歌って、文字通り「潮音」を助ける。歌集「藤の実」「白き湾」など「定本四賀光子全歌集」があり、当代女流歌人の頂点に立った。水穂の死後、主宰として、現実に根ざす象徴短歌を確立する。一九七六(昭和五十二)年三月二十三日、九十歳で没した。

太田青丘は一九〇九(明治四十二)年八月二十八日生まれ。東京大学中国文学科を卒業し、法政大学教授となる。歌集「太田青丘全歌

集」のほかにも多くの研究著作がある。水穂・光子の後を継いで「潮音」を主宰。一九九六(平成八)年十一月十五日、八十七歳で死去した。さて、水穂の最晩年を辿っておかねばならない。「螺鈿」の後、「流鶯」(一九四七)、「昭和二十二年十二月・京都晃文社刊」「双飛燕」(一九五二)、「同二十六年二月・長谷川書房刊」四賀光子と合著)を出して、戦時中から疎開時代、戦後の病氣療養時代などを、淡々とした天真流露の思いに託して歌う。最終歌集は「老蘇の森」(一九五五)、「同三十二年二月・潮音社刊」であるが、没後に光子と青丘によって編集されたもの。

思ひのこすこと一つなし白雲の悠々と  
して山を離れむ  
もの忘れまたうち忘れかくしつづつ生命  
をさへや明日は忘れむ

一九五五年一月一日、初日を浴びて眠るがごとくに、八十歳の生涯を閉じた。信念としての「日本的象徴」を説き、その実践の象徴歌風を打ち立てて、写実短歌に抗した魂であった。論敵・斎藤茂吉をして「信州人の勉強の美德をもつて、よくもよくもアララギの悪口を言ってきた」といわしめた一匹狼であった。墓は神奈川・北鎌倉の東慶寺にある。

(おおたき・ていいち「雲珠」主宰)